旧野良崎灯明台を移設

七日、関係者集い、除幕式

厳原港開港百周年記念事業実行委員会（会長・渕上清厳原町長）は先日、明治から大正にかけて、厳原港を行き交う船の案内役を果たしてきた旧野良崎灯明台を、同港二号岸壁（合同庁舎裏）に移設した。開港百周年行事の一環。

灯明台は明治九年に地元問屋五軒が建造。大正三年に町が建設した近代的灯台に替わるまで、風雪に耐えながら岬の位置を船舶に知らせ、航海の安全を守ってきた。第二次世界大戦後、間もなくして解体されたが、その後、同町天道茂の消防署職員吉田有慶さん（51）の父・善助さん（故人）が復元し、二代にわたって吉田さん宅で保存されていた。灯明台は高さ二・八㍍の石積み。

▲移設した灯明台（厳原港）

純和式で造られていて、当時のなごりを今も伝えている。

厳原海上保安部灯台課では「純和式灯台の現存例は全国的にみても少ない。地元問屋が建造したことは極めて珍しい」。同町では「この地に移設することで、先達の心を偲び、永く顕彰したい」と話している。

七日午前、関係者などが集まって除幕式を予定している。

マダイの稚魚放流

全島地先に20万尾

対馬地域栽培漁業推進協議会（会長・小田只雄＝峰町東部漁協長、十七漁協で組織）は二日と四日、島内六町地先に、マダイの稚魚二十万尾を放流した。

稚魚は美津島町漁協尾崎支所で中間育成（十㌢）したものを船に積み込み、各町の浅茅湾などに放した。

県は、平成八年度から、マダイの生育環境に適している浅茅湾一帯でマダイの資源を増やすため、平成十四年度までの七年間に百四十万尾のマダイ稚魚を全島で放流する計画。今年も同事業の一環で行った。

関係者などが昨年実施した湾内延縄調査に

提言

青年の郷土の親睦団体

対馬会にぜひ入会を切望

対馬出身者が郷土の親睦団体として、設立運営している東京・関西・福岡・長崎の各対馬会は年一回の懇親会を兼ねた総会を、六月初旬ですべて無事終了した。

しかし、ひとつ気がかりなことがあるのであえてペンを執ったわけである。

それは総会の出席が年々減っていることである。たとえば、今年の東京対馬会出席は四十二名（昨年は五十二名）、福岡対馬会は会員四十五名、来賓五十五名の出席だった。福岡・対馬会が最も近いので来賓の多いのはうなずけるが…）残念ながら関西・長崎の両対馬会の出席者は不明。

東京対馬会の場合、平成十一年度の名簿には約四百九十名が掲載されているが、出席者は一割にも満たない四十二名とは、全く淋しい限りである。（もちろん、事務局では全員に返信付きの通知状は出しているのだが）。

出席者は大半が四十歳以上の人が多く、二十～三十歳台の若い人が少ないことが実に残念であり、淋しい。

おそらく、若い人は「出席しても年輩の人ばかりで、知己もないので出てもつまらない…」というのが大きな理由であろう。

もちろん、役員諸氏は若い人の入会に努めているのだが。

とにかく、二十～三十歳台の若い人を誘って入会してもらい、清新の気を吹き込んでほしいのである。

毎年、対馬の三高校卒業生のうち進学、就職のため福岡、関西、東京へ出ていると思う（地域的には福岡、大阪方面が多いと思われる）これら対馬を離れる青年に、当校長、または町長さんが「ぜひ郷土の親睦団体に入って、先輩の話を聞くように」強力に指導・助言を与えていただきたい。

これは東京に限らず関西・福岡・長崎も同じ悩みを抱えているはずだ。重ねて言う。「東京、関西、福岡、長崎に在住の対馬出身の二十～三十歳台の青年男女の皆さん、ぜひ各地の対馬会に入会してほしい。そして同郷の先輩諸氏と大いに語り合っていただきたい。人を知るということは実にすばらしいことであり、必ずその人の人生や生活にプラスになると確信している。

最近の対馬会は老壮年が多いようになった。そこで、これら若い人たちが入って青年の新しい発想を出して、会に「若さと清新な息吹を」をまき起こしてほしいと思うのは、決して筆者だけではないと思っている。

（東京・酒井正男）

対馬新聞

長崎県下県郡厳原町日吉
合資会社 対馬新聞社
郵便番号 817-0012
電　話 09205 ② 0235
FAX専用 09205 ② 7580
発行人　明石雅操
毎週金曜日発行
印刷／㈾厳原印刷所
購読料　1カ月1,000円
振替口座　01750-4-33895
十八銀行対馬支店 ㊐ 10040
親和銀行対馬支店 ㊐ 24600

郷土一の銘酒
風紋
白嶽
美津島町
河内酒造会社